

販売革新部門

経営改善や地域農業振興など優れた功績を挙げた農業者を表彰する全国優良経営体表彰。本年度の農林水産大臣賞に選ばれた経営体を紹介する。

◆ ◆
水田約55畝の経営と60畝の作業受託を行う(有)内田農場(熊本県阿蘇市)。内田智也社長(36)は主食用米、醸造用、もち用、加工用、米粉用と取引先の需要に応じて8品種を作付けしている。業務用や加工用を中心に、8割以上が契約栽培だ。

内田社長は大学卒業後に父が設立した農業法人に就職。当時はJA出荷が9割だったことから、新たな販路の開拓

「求められる」米づくり

熊本・阿蘇市(有)内田農場
代表取締役・内田智也さん

受注生産を実現し強い経営に

に取り組んだ。そのような中、就農2年目に大きな転機が訪れた。

取引先からの紹介で、焼き肉屋と商談。味には自信があったので、数量や価格の打ち合わせのつもりで臨んだ。しかし結果は「やわらかくて甘く、おいしいが、うちでは使えない。タレをつけた肉をごはんのにせて食べるには硬い米がいい」と断られた。内田社長は「米農家として力不足を感じたと同時に、求められる米を作る大切さに気付かさ

れた」と振り返る。

その後、需要に応えるまま、次々に作付け品種を増やした。大手牛丼チェーン用やカレー・チャーハン用に加え、酒米、甘酒・みそ・しょうゆ用の加工用米、米粉用米と、5年前には最大で15品種を作付けた。その後、精米の手間などを考慮し、現在の8品種に落ち着いた。内田社長は「米の需給ひっ迫が言われるが、取引先からは使いたい米は足りないと言われている。受注生産を実現できれば経営として強い」と先を見据えて

積極的に利用権交換

むね30㍏区画だが、地主と相談しながら、畦畔を取り払い、60㍏〜1畝に自主施工を進めている。担い手同士で話し合い、借入農地の利用権の交換にも積極的だ。

多品種の栽培は、作業の分散にもつながっている。主食用米に県ブランド米で晩稲の「森のくまさん」、11月まで育てても胴割れしない「ミツヒカリ」を加工用として作付け。これにより収穫は8月中旬〜11月に分散する。台風のリスクは伴うが、メリットの方が多いと判断した。

内田社長は「地域に根差した農地の受け皿として、今後長く経営を続けることが目標。そのため、状況の変化に対応しながら喜ばれる米、欲しいと話す。



消費者への直接販売や自社の名入り日本酒も製造する内田社長